

2022 年度第 5 回研究会（通算第 10 回）

開催日時：2023 年 1 月 29 日（日）：13 時 30 分～17 時 30 分

場所：オンライン会議室

共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「言語変化・変異と言語獲得」というテーマのもとで、4 名のメンバーが、それぞれの分野内の話題を 35 分で提供し、4 名のディスカッサントおよび他の参加者の間で、20 分の質疑応答や意見交換を行った。

今回の発表の中には、共同研究の成果の発表が 2 件含まれていた。

各発表の概要は以下のとおりである。

講師 1：青木博史 (Hirofumi Aoki; 九州大学)

「補助動詞と軽動詞 —古典語の「スル」—」

(A study of “*suru*” in classical Japanese)

現代語における動詞「スル」は、他動詞としての用法が基本であると考えられ、したがって次の (1) のような「スル」は、“軽動詞”あるいは“補助動詞”と呼ばれることがある。

- (1) a. 花子は切れ長の目をしている。
b. 次郎は振り返りもせずに行ってしまった。

上代には、(1b) のような「動詞連用形+係助詞+スル」という用法 (= 2a) に加え、動詞連用形に直接する用法 (= 2b) も見られ、“補助動詞”の「スル」を認めることができる。

- (2) a. 老いもせず死にもせずして永き世にありけるものを (万 1740)
b. 海の玉藻こそ引けば絶えすれあどか絶えせむ (万 3397)

(1a) のような、主体の属性を表す「連体修飾+名詞+シテイル」は、中古にも見られる (= 3a) が、同じ構文は「の」 (= 主格) でマークされることがある (= 3b)。

- (3) a. 心やすくうつくしきさま ϕ したまへり (源氏・若菜上)
b. 見てはうち笑まれぬべきさまの したまへれば (源氏・桐壺)

「空よりも落ちぬべき心地する（竹取）」「表袴つやつやとして（蜻蛉・下）」「家遠くして（万 3715）」のような、「名詞＋（連用修飾）＋スル」の例をふまえると、（1a）は元来は自動詞構文であったと考えられる。古典語の「スル」は自動詞としての用法も十分に備えていたのであり、したがって古典語の「スル」に“軽動詞”を認める必要はないと考えられる。

講師2：前田雅子(Masako Maeda; 九州大学)・中村太一(Taichi Nakamura; 東北大学)・瀧田健介 (Kensuke Takita; 同志社大学)

「日本語の Predicate Doubling と TP 削除」

(Predicate Doubling in Japanese and TP-deletion)

本発表では、通言語的に観察される Predicate Doubling (PD)の特徴と、それらが VP/TP の前置＋動詞の典型的位置での二重の発音というメカニズムにより派生されるという分析を概観した。その後、日本語の PD は、移動ではなく、等位構造において第2等位項における TP 削除が関わりと提案した。この提案により、日本語の PD における任意の主語/目的語の生起や idiom 解釈、wh 句の生起条件について妥当な説明が与えられると主張した。

講師3：時崎久夫 (Hisao Tokizaki; 札幌大学)・桑名保智 (Yasutomo Kuwana; 旭川医科大学)

「目的語・斜格・動詞の語順と格標示」

(The order of object, oblique & verb and case marking)

世界の言語における目的語・斜格・動詞の語順について、世界言語構造地図 (The world atlas of language structure) のデータを基に、発話処理と格表示の点から考察した。Hawkins (2008)の、「構成素構造を短い範囲で把握できる語順が好まれる」という領域最小化 (Minimize Domains) の原理に、「主要部末尾語順は主要部先頭語順よりも接続 (juncture) が強い」という仮定を加えることで、可能な語順 (VOX, XOY, OXV, OVX)を説明することができることを論じた。また、OV 語順の言語では、格表示を持たないか、対格あるいは能格を持つかによって、3つの語順 (XOV, OXV, OVX)に分かれるとする可能性を示した。

講師 4 : 米田信子 (Nobuko Yoneda; 大阪大学)

「タンザニアのバントゥ諸語に見られる「スワヒリ語化」：マテング語を例に」

(Swahilization" of Bantu Languages in Tanzania: The case of Matengo)

タンザニアでは 100 以上のバントゥ諸語が話されているが、中でも公用語のひとつになっているスワヒリ語は共通語として国中に広く深く浸透している。その結果、タンザニアのバントゥ諸語にはさまざまなレベルでスワヒリ語の影響が見られる。たとえば、タンザニア西南端で話されているマテング語では /i, i:, e, e:, ε, ε:, a, a:, ɔ, ɔ:, o, o:, u, u:/ の 14 母音が音素として区別されるが、近年では長短の対立はほぼ失われている。さらに若い世代になると、/e/と/ε/、/o/と/ɔ/ の区別をしていない話者も増えている。いずれも 5 母音体系のスワヒリ語の影響だと思われる。最も影響が大きいのは語彙で、マテング語の本来語がある場合でもスワヒリ語からの借用語を用いるケースが増えている。機能語の借用の結果、新しい構文が用いられるようになるなど文法にも影響が見られる。